ヘボン (James Curtis Hepburn: 1815-1911) の書簡にみる救療事業

James Curtis Hepburn (1815-1911) and
Medical Treatment Aid

防衛医科大学校

澤 井 清*
清 水 勝 嘉**

本稿は、開国後の来日宣教医および来日アメリカ人医師の第1号であるヘボンが本国に送った書簡を中心に、彼が行った救療事業について述べたものである。ヘボンが行った救療事業は、キリスト教宣教の手段であった。ヘボンは1861年4月から9月までの神奈川宗興寺における6ヶ月間と、さらに1862年12月に横浜の居留地39番に居を移してから1879年春までの合計18年間、救療事業を行った。ヘボンの書簡の中に記されている内容は幕末・維新期にかけてのわが国の民衆の疾病状況あるいはヘボン自身が行った手術などを詳細に知らせてくれる。ヘボンの行った救療事業は完全無料であり、当時わが国に欠けていた社会事業を補完するものと考えてよい。

I はじめに

わが国のキリスト教は、天文18年(1549)7月に鹿児島にきたフランシスコ・ザビエルによってもたらされたものである。その後弘治2年(1557)にポルトガル人ルイ・アルメイダが豊後の府内(現在の大分)にわが国で最初の西洋医学による総合的な病院を建てている。この病院はキリシタン大名大友宗麟の手厚い保護の下でベット数約100床のものであったといわれている。この間の事情について富士川游の「日本医学史」¹⁾のなかを要約すると次のようになる。

「アルメイダ時ニ年三十、此人ハ其志極メテ善良ニシテ、学浅ケレドモ、才多ク、救済院ヲ二箇所設ケ、又同年、豊後ノ国主大友宗麟ガ耶蘇教ヲ信奉シ、救済院ヲ設ケ、歲月ヲ経ズンテ府内ヘ救済院ヲ設ケラレシコト三箇所ニ及ベリ、一ハ幼児ノタメ、一ハ癩病ノタメ、一ハ窮民病者ノタメナリ。コレ実ニ西洋人ガ我が邦ニ来タリテ医術ヲ施シタル嚆矢、云々」。現在大分市には、アルメイ

ダを記念して同市医師会立アルメイダ病院がある。²⁾³⁾

豊後の救済病院は大友氏の滅亡とともに消え、他の場所で行われていたキリスト教宣教のための救療事業はその時の権力者の意志によって左右され、基盤の弱いものであった。

その後、天正15年(1587)にはキリスト教布教禁止令がだされ、翌年には豊臣秀吉によりキリスト教徒の長崎からの追放が行われ、年を経るにしたがいこの措置は厳重になっていった。そして寛永12年(1635)の鎖国令により、キリスト教の宣教は事実上終息した。江戸時代の西洋からの医学の導入はキリスト教と直接関係なく、オランダ医学が中心であった。

ここでは安政5年(1858)、わが国が諸外国と通商条約を結んだ後に次々に来日した宣教医のうちのひとり、J. C. ヘボンの行った救療事業を中心に述べる。

ヘボンは来日宣教医の最初で、また来日アメリカ人医師の第1号でもあった。幕末から維新にかけては数多くのお雇い外国人医師が来日しているが、このヘボンはキリスト教の宣教を主要目的にし、その手段として救療事業を行い、特異な功績を示した。⁴⁾⁵⁾

ヘボンは米国長老教会(Broad of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the United States of America)に所属し、この長老教会にあてたなかば公式

* Kiyoshi SAWAI: National Defense Medical College Library

** Katsuyoshi SHIMIZU: Department of Public Health, National Defense Medical College

(昭和53年10月5日受理)

の宣教報告の書簡 121 通が高谷道男氏によりまとめられ「ヘボン書簡集」⁹⁾として出版された。また、同じく高谷氏によって、ヘボン夫妻が弟スレーター・ヘップバーン牧師に宛てた手紙のうち52通を抄訳したものを「ヘボンの手紙」⁷⁾として1冊にまとめあげられた。ここでは「ヘボン書簡集」を書簡集と、「ヘボンの手紙」を単に手紙と略した。前者の書簡集はミッション本部に報告した日本における宣教の状態の報告、日本の政治、外交、会社、宗教などのことがらが中心であり、後者のものはきわめて個人的な内容であった。書簡集、手紙の2つをみることにより、ヘボンが行った幕末・維新から明治初期にかけての救療活動を知ることができる。しかも、わが国の医学がドイツ医学の導入確立する間の空間を埋めるものとして、また幕末・維新から明治初期の民衆の医療状態などを示しているために、ヘボンの実施した救療事業を知ることには興味のあることである。

Ⅱ James Curtis Hepburn のこと

Hepburn のことをわが国ではヘボンと呼んでいるが、正しくはヘップバーンと発音すべきものであるが、彼自らが「平文」と号しており、またヘボン式ローマ字であまりにもよく知られているためにヘボンと呼んだ方が一般に理解される。本稿でもこれに従っている。

ヘボンは1815年3月13日アメリカ合衆国ペンシルヴァニア州ミルトンに生まれ、長じてプリンストン大学を卒業し、次いでペンシルヴァニア大学医学部に学び、1836年21歳で医師の免許を得た。

ヘボンが医学を学んだ時期は1910年に、フレクスナー報告がだされる以前であり、アメリカの医学教育が現在のように確立されていず、医学校の乱立と医師の乱造をまねいており、医師の社会的地位も低かった。⁸⁾

21歳で医師になったヘボンは「生活するに善い地位を尋ねてここ1年、かしこ1年、所々に住み」⁹⁾6年をアメリカに過した。しかし、アメリカには「医者が多くありまして余計過ぎて居りました」。⁹⁾ヘボンは1840年に外国宣教の精神において共鳴したクララ・リート嬢と結婚し、次いで外国宣教の精神の高まりにより1841年から中国の廈門で医療伝導の救療事業を始めたが、夫人の病氣により5ヶ月で帰国した。

ヘボンは1846年から13年間、ニューヨーク市で眼科を開業していたが、日米通商条約の締結とともに、キリスト教宣教のために安政6年(1859)10月18日に神奈川に第一歩をしるした。

医学図書館25巻3号('78)

ヘボンは日本にきた理由とその後のわが国での生活を明治25年(1892)10月25日送別会の席上で次のように述べている。〔私はシナに居る時も度々日本のことを思い出しました。また予て日本の評判を聞きましたにはキリスト教を嫌い、イエスの信者を殺すとのことでございました。けれどもこの日本から医者或はイエス・キリストを愛する所の信者のできることを願いました〕¹⁰⁾と宣教医の精神の発露をわが国にもとめてきた。神奈川での救療事業は幕府の妨害により短期間で終わったが、横浜の居留地に移ってからの救療事業は15年間続いた。〔療治…タイテイ病人を療治した事15年…、幾万の病人を助けたいと力を尽しましたけれど、私も自分が病氣になりました。そしてモウこの時日本に医者が多くなり医学校も東京に設けられ、矢張り西洋の国から上手な医者が参りまして日本の人を助けますから、私の療治をすることは無駄と思ひまして、その代り日本人の益をなさんがために聖書(新約、旧約の双方の邦訳)または字引(和英語林集成)を翻訳…友だちと共に聖書の翻訳しました。字引を拵えて今日まで日本人のために力を尽しました¹²⁾(かっこ内筆者注)〕。

ヘボンは明治25年(1892)10月まで、満33年間在日し、アメリカに帰国した。そして1911年9月21日、ヘボンはイースト・オレンジの自宅で96歳の生涯をとじた。

ヘボンの帰国の際の記事は中野 操著「増補日本医事大年表」¹⁰⁾の明治25年(1892)10月25日の項に次のように簡潔に記されている。

明治25年10月25日

ヘボン米国ニ帰ル。三十年前横浜ニ来リ布教ト同時ニ施療医院ヲ開キ救療事業ニ尽ストコロ少カラズ。邦訳聖書及ヘボン辞書大ニ世ニ行ハル。後ソノ功績ヲ嘉賞シ勲三等ニ叙シ旭日章ヲ授ク。

Ⅲ ヘボンの救療事業

ヘボンの救療事業についてはすでに高谷氏が「人物叢書ヘボン」のなかで要領よくまとめている。ここでは書簡集を中心に用い、適宜手紙を利用しながら説明を加えてゆく。

〔 〕に示してあるものは書簡集あるいは手紙の本文である。

1860年3月7日¹¹⁾

2月29日の日記で32歳の医者がヘボンの日本人教師になったことを記しており、この3月7日の書簡でア

メリカ公使館附の医師となり、神奈川の成仏寺における生活が始まったことを知らせている。

1860年5月14日¹²⁹

〔この数日間に4人の患者の手当をしました。その3人はわたしどもの番所の係の立派な武士たちでありました。わたしはちょっとした手術を施しましたが、苦痛がとれてとても喜んでいました。わたしも喜んで施療所を開きたいと思いますが、まだ言葉が充分に話せませんし、役人からもその開設にはやかましい反対が起りそうですから〕〔外国人の間にも患者があって診療してあげました。〕

また、1860年5月5日の手紙¹³⁰のなかでヘボンは日本の社会の複雑さと、キリスト教宣教の障害の多いことを書き送っており、その宣教の足場として施療所の開設を望み、住民に対し救療事業を行いたいとしていた。アメリカ公使のハリスとの会談でもヘボンは施療の方針をあくまでも無料であることを表明していた。しかし、外国人が家か部屋を借りるためには奉行に願い出なければならず、そのことと日本語の会話が不十分であったためにヘボンは施療所の開設を憂慮していた。

1860年6月5日¹⁴⁰

〔わたしの職柄の医術についても人々に何かお役に立つような機会がふえてきました。患者はまだ武士だとか、ここに居住している外国の下僕ぐらいですが、それでも幾人かは病気が癒えたので、非常に感謝しているようです。それに患者はこの地域に住んでいる公使や領事ばかりでしたから、自然に日本人々にもかなりよく知られるようになってきたのです。〕

このようにヘボンは忍耐強く、日本人に対し外国人とキリスト教に対する不安と偏見をとり除く努力をしたが、この時期にはキリスト教の宣教行為を慎重にも行わなかった。それは日本語が十分に話せなかったばかりでなく、オランダ人の殺害事件や井伊大老の暗殺など血生臭い事件を知っていたからである。そして施療の患者は増加していったために、ヘボンは施療所を開きたいと思っていたが、成功の見込みはたっていなかった。この間にも施療は行っており、幕末横浜開港当時来日していたフランス公使ベルクールが馬から落ちて負傷しヘボンの治療をうけたこともあった。¹⁵⁰

1861年4月17日¹⁶⁰

〔宗興寺を施療所兼病院として1、2ヶ月試験的に借りることにいたしました。毎日幾人かの施療患者と1人の入院患者がおります。〕

この宗興寺の救療事業も純粹に医学的なものであったから実施できたものであり、もしこの時期にキリスト教の宣教の意図が表面化したら、この救療行為も直ちに中止になることは間違いないところであった。ヘボンは4日15日の手紙¹⁷⁰で「おだやかな方法で宣教糸口をつけよう」と思っていたと本音を本国に知らせていた。

1861年5月17日¹⁸⁰

〔最初にわたしの扱った患者はほとんど江戸からやってきた人々でした。江戸で医者をやっていた日本語の教師から、わたしのことをきいた2、3人の江戸の医者で紹介でわたしのところへよこしたものです。江戸の医者たちは彼らの手に負えない難病ばかりをよこしました。不治の病、例えば肺結核、神経麻痺、脳病、つんば、めくら、びっこの類です。治癒という点では、がっかりするものばかりでしたが、こういう病人にわたしの考えを話して、何ら手のつくしようがないので、かえしてしまいました。しかし、わたしはまた医者たちを生徒として置いております。今でも15名から20名くらいの患者を毎日診察しており、このほか2人の入院患者もあります。多くは眼科の患者ばかりです。わたしは癍痕性内反という眼病の手術をしてやりました。神奈川や江戸や田舎からやってきましたが、中には両刀をさした武士、足輕、幕府の役人もいました。〕〔医療事業は民衆の偏見をとりのぞき、日本人と自由に交際する途をひらく上に大いに役立つことでしょう。〕

このようにヘボンの救療事業は盛況になり、とくに眼科医としての実力を発揮していた。当時の江戸から横浜までの距離は普通人の徒歩で1日かかりであった。このことからヘボンの施療の人氣がわかる。古典落語に犬の目というのがある。これは眼病の患者の眼を町医者がとりだし洗って縁側のひなたに干しておいたら、近所の犬が食べてしまったので、その犬の眼を取り、かわりに患者にいれたら夜も見えるようになったという話である。この町の眼科医が横浜のヘボン先生の弟子のシャボン先生に習ったと言っている。この落語に示されているようにヘボンの名前は江戸の庶民のなかにあった。しかしこの時期キリスト教宣教のことは一言半句も患者にはつづいていないことから、いかにヘボンの忍耐が強かったかがうかがわれる。

1861年6月22日¹⁹⁰

〔患者もなかなか多くなりました。最初新しい患者を迎えるために毎日開いていたのですが、診察したり

薬の処方をしてしるばかりでなく、薬の調合をやり、そのほとんどに薬をのませたりしなければならぬのでわたしの力ではやりきれないということがわかりました。今では月曜、水曜、金曜だけ開くことにしました。外来患者は100人から150人くらいで、先月は1,000人以上の処方箋を書きました。患者は田舎からでも沢山来ましたが、江戸からは特に大勢来しました。幾人かの入院患者には手術を施しました。]

ヘボンは救療事業に使用した薬品類はミッション本部に請求しており、ヘボンが行った施療は完全に無料であった。そのため江戸の庶民で医学の恩恵にあずからないものは神奈川の宗興寺の施療所まできて治療を受けた。

1861年7月11日²⁰⁾

〔病院と施療所は繁昌しています。月曜、水曜、金曜ときめた曜日に治療した人数は100人から150人ぐらになります。〕

1861年9月8日²¹⁾

〔わたしの施療所と病院とは閉鎖されました。その歴史は短いものでした。5カ月ばかりつづいただけです。最初患者はわずかでしたがまもなく非常に増加し、その後3ヶ月間は1日平均100人の患者を診察しました、ほとんど助手がいなかったので満足な記録をつけることができませんでしたから、人数だけ申し上げますが、計3,500人の患者に処方箋をかきました。それは毎回ちがった患者の延人員ではなかったのです。他の手術以外に癰疽性内反の手術30回、翼状片の手術3回、眼救を摘出したのが1回、脳水腫の手術5回、背中のおでき切開1回、白内障の治療13回、痔瘻の手術6回、直腸炎1回、チフスの治療3回行いました。そのうち1回だけ白内障の手術はうまくいかず、他はみな上出来でした。多数の患者の病苦を軽減し、これを治癒し、またわたしのようなものがこういう貧しい人々に何かお役に立つようなことをしたことを知って嬉しく思います。〕

ヘボンが施療所を事実上閉鎖することになったのは、幕府が施療を受ける手続きを複雑にし、患者がヘボンに近づけないように妨害したためである。ヘボンが宗興寺でわずかな期間に上記に示した数多くの手術を行ったことは宣教医の性格を端的に表わしていた。

ヘボンの神奈川宗興寺における救療事業は約5ヶ月間の短期で終ることになったが、施療所の閉鎖後も役人から許可書もらった患者が訪ねてくれば処方箋を書いていた。²²⁾その後横浜に移るまでは数名の患者を相手に日

本語の勉強をしていた。ヘボンがミッション本部に送った書簡のなかにわが国の伝染病について書かれているものがあった。たとえば1862年9月1日付の書簡²³⁾では6月17日から8月11日にいたる56日間にわたりコレラ患者567,713人中、江戸だけで73,158人が死亡したと書いている。このコレラの流行は江戸市中において安政5年のコレラ大流行より死亡率が高かったと言われている。またこの年ははしかの流行もはげしかった。

1862年12月29日にヘボンは神奈川から横浜の外人居留地39番地に居を移住した。そしてそこで本格的な救療事業と宣教を始めるのであった。

1863年6月15日²⁴⁾

〔今日、この地域に配備されている日本の軍隊配属の1人の医者の訪問をうけました。この医者は癩病、結核、リュウマチの治療について聴きにきたのです。また手術に用いる医療器械をみに来たのです。彼は特に医療器械に興味をもっていました。〕

ヘボンの横浜での救療事業は最初の10年間は毎日行い、はじめの頃の患者数は平均1日5、6人で眼疾が多かった。²⁵⁾

この時期になるとヘボンは患者たちに宣教をはじめている。²⁴⁾

1864年7月25日²⁶⁾

〔毎朝、わたしの施療所に20人ないし30人の患者が来ます。〕

1864年9月2日²⁷⁾

〔毎日30名ばかりの患者の診療や往診、ときには患者の家庭で手術をやることもあります。〕

1865年3月16日²⁸⁾

〔施療所はなお毎日開いていますが、冬は寒のためと早朝7時から8時までのため患者は他の季節より少ないです。数日前日本人の砲兵の腕を切断しました。この武士は鉄砲の事前発火によって重傷を負ったので治療を必要としたのです。こうした手術は少なくともこの地方、または江戸においても日本人に施されたのはこれが初めてです。これは日本の医師たちの証言でそう判断した次第です。〕

この日本人砲兵の腕の切断術はヘボンが眼科に秀でていただけでなく、外科手術の技術の水準も高かったことを示したものであった。この頃になるとヘボンの施療所に2、3人の若い医学生と1、2人の老人の医者が毎日来てヘボンのやる医療や手術を見学するようになった。患者の種類はあいかわらず眼疾に苦しんでいる人達

が多かった。

1865年10月13日²⁹⁾

〔施療所は満足の盛況です。患者は1日平均35人、その10の6は眼病で、かなり多くの手術を行いました。腕の切断は1回、兎唇の手術1回、弾丸の摘出1回、白内障の手術4回、痔の手術数回、その他直腸炎の手術および癰疽性内反や翼状片などの眼疾のかずかず、おできの切開、抜歯、膿瘍の切開などでした。〕

ヘボンは救療事業に忙しい中でも、本来の目的である宣教活動を行っていた。患者に福音を説き、ヘボンのもう1つの仕事であった辞書の編集をおし進めていた。この年にヘボンによる最初の日本人のキリスト教改宗者がでている。³⁰⁾

1866年6月2日³¹⁾

〔施療所では患者が大勢きております。現在は毎日平均50名ばかり、どれも大部分が眼病です。色々の種類の治療を沢山やっており、患者の種類は上は御老中から下は路傍の癩病やみの乞食にいたるまで、あらゆる階層にわたっております。診察している患者の大部分は老人で不治の病人です。〕〔日本人の死亡率はかなり高いのです。この国民ほど肉慾の罰に耽って恥じない国民をみたことがありません。彼らの罪悪はその健康を害し病気におかされて死亡を早め、よく死なないまでも婦人やその子供たちは遺伝的に虚弱な身体と梅毒や結核などの病気に犯されているのです。〕

5月25日の手紙³²⁾によれば「前年度において10,000人を越える患者に処方箋を書きました」とある。ヘボンは1865年度の毎日30名以上の患者を診療していた。

1867年6月22日³³⁾

〔施療所は日曜日以外毎朝患者の数によって9時から10時半あるいは11時まで時には12時まで開いており、それで毎日患者を大体15人から20人ぐらい診察しております。〕

1867年10月22日³⁴⁾

〔患者は大体以前と同数で晴天の時は1日30人ばかりです。患者は各地からやってきます。病気はおもに慢性でその多くは不治の病人です。眼や耳や皮膚の病気が多く、その他梅毒、瘰癧、結核、胃病、リュウマチの類です。手術はかなり多く行いましたが、その中でも今年は下顎の一部分を切断したのと腿の手術をしたのと2つがそのおもなものでありました。〕

このなかにある腿の手術とはおそらく俳優の沢村田之助が脱疽を患ったのを治療するために、左の股から切断

したことを指しているものとみられる。この手術はクロロホルム麻酔下で行われ、翌年4月にアメリカの義足を田之助に装着した。³⁵⁾この手術と義足が世間でいかに評判を呼んだかは錦絵になったことでもわかる。「医制百年史」の口絵のなかに「フランスの名医足病療治」というものがあるが、このフランスの名医はアメリカ人のヘボンのことであった。³⁶⁾

ここでヘボンの救療事業の経済的裏づけについて述べる。ヘボンの施療所が順調に運営できたのは十分な寄附が得られたからである。1867年10月22日付の書簡³⁴⁾によると「この地ではわたしが金のいることをほのめかすと、いつでも援助してくれる友人が気前よく金を出してくれるので、ミッション本部に負担をかけずにやって行けるのです。右の寄附のうちイギリス公使サー・ハリー・パークスより100ドル贈られ、スミス・アーチャー商会から50ドル、フランク・ホール氏から105ドルの価格の薬品1箱寄贈せられました。施療所の1年間のミッションの経費は50ドル程度を超過しておりません」とある。この内容にあるようにヘボンの救療事業は外国人や外国商会の援助や寄附によって運営され、ほとんどミッション本部の負担にはならなかった。ヘボンの救療事業が円滑に長続した原因の1つに経済的な裏づけを求めたのもよいであろう。

1868年に入るとヘボンは今まで使用していた救療所が小さく、腐ってきたので同じ敷地内に新しい施療所を建設することにした。

1868年以後のヘボンの書簡のなかには明治維新のたたかい、伝導の状況、横浜の発展、長崎浦上のキリシタンの迫害などが触れられていた。

1869年10月26日³⁷⁾

〔施療所は9時から11時まで、医学生のカラスは12時まで、翻訳は午後1時から4時までです。〕

このなかにある医学生のカラスというのは1週間に23日、5人から10人ぐらいの医学生をヘボンが教育していたものであった。1871年2月16日付の手紙³⁸⁾のなかで、「約10名の知識に飢えた医学生が几帳面に9時にきてわたしを待っているのです。医学の知識のパンくずのようなもので彼らを養うのです」とあるように、これは幕末・維新时期に江戸周辺に西洋医学が系統だてて教育されているところがなかったために、ヘボンの名声をしいたって向学心に強い青年が横浜に集まったものである。

ヘボンの施療所には各階層の患者がつめかけてきており、1870、1871、1872年と毎日ヘボンは施療していた。³⁹⁾

1874年1月22日⁴⁰⁾

〔わたしは再び療養所を開き、昨日から療養をはじめて週2回水曜日に土曜日に患者のために開いております。〕

1874年9月25日付の手紙⁴¹⁾のなかでも〔わたしは1週間2回療養所を開いております。あらゆる種類の患者が多勢来ます。大部分は治療できません。〕1日おおよそ20人前後の患者を療養していた。あるいはヘボン夫妻が地方に旅行しても医者だとわかると患者が殺倒した。

1876年に入るとヘボンが療養所で働くのは1週間に土曜日1日だけとなった。⁴²⁾

1877年7月11日⁴³⁾

〔エルドリッジ博士の助力を得て、療養事業をはじめました。〕

この時期のエルドリッジは横浜で開業していた時にあたる。石橋長英、小川鼎三著、お雇い外国人(9)医学⁴⁴⁾のなかのエルドリッジの項にはヘボンと一緒に仕事をしたことについてふれられていない。

以上が「ヘボン書簡集」および「ヘボンの手紙」にあられた、ヘボンが行った救療事業の項目のほとんどである。

ヘボンの救療事業は1879年（明治12年）の春まで続けられた。ヘボンが救療事業を打ち切った理由は、本人が健康を害したこと、旧訳聖書翻訳の中央委員会の代表になり多忙になったため、それからいま1つは日本に医師がふえてきたためである。

Ⅳ おわりに

ここでは開国後の来日宣教医の最初であり、また来日アメリカ人医師の第1号であったヘボンが本国に送った書簡より、わが国の幕末維新时期および明治初期の救療事業の一端をのぞいた。ヘボンが行った救療事業はキリスト教宣教の手段であったが、この救療事業が完全に無料で行われたことは、当時のわが国に欠けていた社会事業を補完するものであった。

ヘボンが18年間にわたって救療事業を行ったことは、医師としての力量が十分であったばかりでなく、キリスト教に支えられた愛の業績と考えることができる。

参 考 文 献

- 1) 富士川 游：日本医学史，形成社，1974，P.260—261.

医学図書館25巻3号('78)

- 2) 吉川 暉：大分市医師会と地域保健活動，公衆衛生37(7)：458—464，1973.
- 3) 杉田 肇：医師会病院を軸とする地域医療計画，公衆衛生40(2)：118—124，1976.
- 4) 石橋長英，小川鼎三：お雇い外国人(9)医学，鹿島出版会，1969，P.28.
- 5) ユネスコ東アジア文化研究センター編：資料御雇外国人，小学館，P.192.
- 6) 高谷道男編訳：ヘボン書簡集，岩波書店，1977.
- 7) 高谷道男編訳：ヘボンの手紙，有隣堂，横浜，1976.
- 8) 荻島秀男他：米国の医学教育と医療事情，医学書院，1970，P.5—17.
- 9) 7)の文献 232—235.
- 10) 中野 操：増補日本医事年表，思文閣，京都，1972，P.231.
- 11) 6)の文献 22—23.
- 12) 6)の文献 38—43.
- 13) 7)の文献 60—65.
- 14) 6)の文献 45—50.
- 15) 7)の文献 72.
- 16) 6)の文献 79—82.
- 17) 7)の文献 73—77.
- 18) 6)の文献 83—26.
- 19) 6)の文献 86—88.
- 20) 6)の文献 89—91.
- 21) 6)の文献 91—95.
- 22) 6)の文献 108—111.
- 23) 6)の文献 104—110.
- 24) 6)の文献 134—137.
- 25) 6)の文献 138—141.
- 26) 6)の文献 148—149.
- 27) 6)の文献 149—150.
- 28) 6)の文献 154—155.
- 29) 6)の文献 161—164.
- 30) 6)の文献 165—169.
- 31) 6)の文献 169—171.
- 32) 7)の文献 94—97.
- 33) 6)の文献 182—187.
- 34) 6)の文献 188—191.
- 35) 長門谷洋治：来日宣教医の位置と性格，医学のあゆみ，76(6)：514—519，1971.
- 36) 高谷道男：人物叢書ヘボン，吉川弘文館，1961，P.104—108.

- 37) 6)の文献 209—211.
- 38) 7)の文献 98.
- 39) 6)の文献 247.
- 40) 6)の文献 255—258.

- 41) 7)の文献 115—119.
- 42) 7)の文献 122—124.
- 43) 6)の文献 286.
- 44) 4)の文献 165—166.